

## 二〇一五年度 入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

## 二限国語 (60分)

## 〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

## マークシート解答方法についての注意

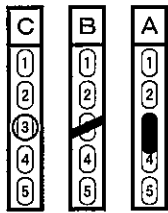
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。



(一) 正しいマークの例

(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間は自分に適した生活を営むために、他の動物とは異なつた住居をこしらえていった。これは、いわば適・不適という生命の次元から生じた価値の実現であると言わねばなるまい。このことはしかし、蛇が熊の閉じ籠る洞窟に満足せず、おのれの冬眠のために、その細さの穴を求めて住むとか、雀は小枝に止まりうるのに、大鷲にはその重みに適した大枝が必要であるというのと、基本的には何ら変わりのない問題である。したがって、この次元での価値は、相対的な測定関係で、客観的に示しうる問題であるかと思われる。

ア、生命的に適しているというだけでは満足せず、ひとはおのれの住居に柔らかなふとんを置くようになる。このことは、いわば快・不快という心理の次元で求められた価値の実現であると考えてよい。しかし、その段階のことであれば、猫が鰹節よりは生きた魚の方を好んで食するという段階と基本的に変わりはない。

しかし、快・不快で世界はかたづくものであろうか。かりに、雨の日自分が不快をまぬかれるからといって、他人の傘を盗み自分だけぬれずに行く、としたらどうであろう。人間の場合、私にとってその快は正しいとは思えないか、思えるかという正義の観念が出て来るものである。こうなつて来ると、たしかに法的な世界で問題となる価値が求められているといつてさしつかえない。

この問題領域においては、先程の快・不快の主観性とは異なつて、客観性が求められてくる。この客観性は、適・不適の価値の場合のように、量的に測定できるものではない。しかし、正義の課題である平等がいかに実現出来るか否かという一つの規準によつて、理論的には確定しうる可能性を持つ段階であるということができよう。つまり、価値の客観性とは物差によるリョウカのみを言うのではない①ということが、ここで理解できればよいと思う。

さて、同じように正義であつても、つまり法的には同等であつても、どちらがより善いかということは議論の対象になるのではないか。たとえば、同僚が病気で入院しているときに、見舞わないということが法的に悪いということではない。また、

見舞うということが法的に善いということでもない。つまり、法的に同等、言いなおしてみるならば、正義という価値の観点からは同等の行為がある場合に、道徳の視点から見直してみても、やはり見舞うほうが、見舞わないで放置しておくよりも善いとか勝れているということができないのではないか。そこに善という価値が求められ、実現される可能性があるということができる。その意味では、たしかに、善は正義や快や適よりも上位の価値であることは疑いえない事実ではなからうか。もとより、価値の関係は、単純に系列化することのできない面を持つてはいるが、しかし、面会が病人にとつて適當ではないかも知れぬという観点から考え直してゆくならば、いきなり見舞うことが、ただちに善であるとは限らない。この例で、もう一度たどり直してみると、病気の本人にとつて面会が適當であるか不適であるか、かりに面会は適當であると考へても、しかし、なお家族の面会時間を減少してまで同僚が介入することが相手にとつて快なのかどうかということは、考へてみなければならぬことなのである。その上でまた、務めのある自分が勤務の時間をさいて病院まで行くことがそうあるべき正しさなのであるかいか、ということが考察され、仕事にさしつかえないことがわかり、上司の許可をえて行くことならば、勤め人としては正しい。イ、行かなくても正しさにおいては変わらないのではないか。しかし仕事の余力があれば、病人を見舞うほうが善い。したがつて、このかぎりでは、善は、<sup>②</sup>今まで語られた価値の中で最高のものであると言つてさしつかえない。

ところで見舞うことが善いとしても、その段階ですべてが尽きるのであるか。われわれは見舞いの品を持って、その病床を尋ねたときに、たとえば、貧しいそのひとの「いいなすけ」から、このチョコレートをもらったよと言つて喜んでる友を見つけた場合に、<sup>③</sup>われわれが用意していた大きなチョコレートの箱を、見舞いだといつて差し出すことが、はたして十分に善いことなのかどうか考へてみなければなるまい。「見舞いを持つてくる暇がなかったよ」と言つて引返し、病院の売場で小さな花を買ひ直して届けるというようなことは、ここに見舞いがあるよ、と言つて大きなチョコレートを出すことと、善さという点では、ほとんど違いはないと思う。どちらも、友のために何かを届けて見舞うのであるから。しかし、病人にとつてかけがえのないひとの小さな贈物を、同種のより大きなもので光をなくしてしまうようなことは止めて、自分はさらに小さな犠牲を払うことになるにしても、もう一度別のものを買ひ直して見舞うというようなところに、心ばえの美しさというものがある。

言ってみると、真に相手の立場に立とうと努力して、本当にこの世を美しくしようという心がけが、行為の美しさ、あるいは思いやりの美しさを生んでゆくのではないかと思う。

たしかに、病院に見舞いに行くことは考えてみれば、<sup>(2)</sup> カンセンする恐れが絶無というものでもあるまいし、自分の勉強に、あるいは仕事に、あるいは休憩に、あるいは遊びに使う時間を犠牲にすることである場合もある。少なくとも、そこに行くということ自体に話を限るなら、一文の得になるわけではなし、何がしかの出費を伴うものであるということは言つてさしつかえないであろう。

そういう意味においては、たしかに一定の規格にしたがった犠牲を払うということが善なのである。ところで、美は何かと<sup>(4)</sup>いうと、その犠牲が規格を越えて大きいということである。ということは、どういう大きさをとるかということが、行為するひとの自由に委ねられているということにもなるのであろう。国のために税金を払い、選挙の義務を果すことは、国に対して正義の価値を示したことになる。しかし、もし視聴覚の不自由な子弟の教育に、何がしかの寄付をするならば、それは善であるといつてよからう。ウ、その恵まれない子弟の教育のために、一生を捧げて、外見的には報われないような仕事を続けるという行為がある場合に、それはただの善ということではもつたない位であると思う。もちろん、人間であるから仕事を取る動機には様々のものがあるに違いない。しかし、今この同情という局面から考える限りは、おのれの生涯を犠牲にしてまでも、その子らに尽すということは、善を越えて美であると言わざるをえない。

こう見てくると、美はその至高の姿においては、宗教の聖と繋がる人間における最高の価値であると言わねばなるまい。美は基本的には、精神の犠牲と表裏する人格の姿なのである。この輝きは、単に義務を<sup>(3)</sup> リコウして、他人から批難されない行ないの正しさ、自己を失うことなしに、道徳的に模範となっている善の落度のなさとは異なつて、積極的な光となつてひとびとの心に明るい灯となるものではあるまいか。われわれは、義のひとを賞讃し、善のひとを賛嘆することはできる。しかし、それらの賞讃や賛嘆がわれわれを動かすであろうか。われわれの命に立ち上る力を与えるもの、それは、輝き出てくる美しさだけなのである。美のひとのみが力をよぶ。

この輝きのゆえに、美はまたすべて輝くものをホウガンする言葉となつてゐる。月に照らされて輝く海辺の砂粒さえも、美しいという言葉でわれわれは呼び、そのことに少しも誤りはない。きらびやかな文章、さびを含んだ文章、それが勝れている場合には、文としての、言葉としての何らかの輝きがあり、それをわれわれは言語芸術とよぶ。そこに少しも誤りはない。しかし、もしわれわれが、このいわば小さな自然の輝きや、小さな芸術の輝きのみを美であると考え、もともと美が輝きであるゆえんのあの人格の美、行為の美を慮外のこととするならば、人類は終りであると思う。最高の価値としての美は、いわば己れを空しくして人類のために、どんな小さなことでもよいから、愛を以てなしてゆこうとする希望に満ちた生き方の中にもとされた、そういう輝きなのである。美は人生の希望であり、人格の光である。

(今道友信「美について」より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 本文中の空欄

ア

ウ

記号を解答欄にマークせよ。

に入る最も適切なものを、つぎの各群の a~e の中からそれぞれ一つ選び、その

- |   |   |      |   |      |   |      |   |       |   |      |
|---|---|------|---|------|---|------|---|-------|---|------|
| ア | a | あるいは | b | そもそも | c | ところが | d | したがって | e | ともかく |
| イ | a | だから  | b | そして  | c | さらに  | d | しかし   | e | ともあれ |
| ウ | a | それでは | b | それゆえ | c | まさに  | d | けれども  | e | とにかく |

問二 傍線部(1)～(4)のカタカナにふさわしい漢字を、つぎの各群のa～hの中からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(1)	リヨウカ	a	良
		b	寮
		c	量
		d	領
		e	歌
(2)	カンセン	a	幹
		b	観
		c	汗
		d	感
		e	選
(3)	リコウ	a	利
		b	裏
		c	離
		d	履
		e	校
(4)	ホウガン	a	砲
		b	包
		c	方
		d	抱
		f	癌
		g	眼
		h	含

問三 傍線部①に「同じように正義であっても、つまり法的には同等であっても、どちらがより善いかということとは議論の対象になる」とあるが、その理由として最も適切なものを、つぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 正義はどれも客観的には善いことに変わりはないが、快・不快の観点からはどちらが善いか決定することができないから。

b たとえば入院している同僚の見舞いに行っても行かなくても正しいのだが、どちらが本当善いのかは法的には決定できないから。

c 客観的な測定をすれば法的には正義ではないのだが、適・不適の観点からはどちらが善いか決定することができるから。

d 同じように正義であっても、たとえば病気で入院している同僚を見舞う行為は、法的な観点からは善くないから。

e 自分の勤務時間をさいて同僚の見舞いに行くと勤務先に迷惑をかけるので、見舞いに行く前に上司の許可をとることが法的な正義であるから。

問四 傍線部②「今まで語られた価値」にあてはまるものを、つぎのa～fの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a たとえば猫がえさを食べるときの適・不適という価値。

b 単純な系列化において正しく善いと言える価値。

c 一つの基準によって客観的に確定しうる価値。

d 快・不快の次元で客観的に示しうる価値。

e 法的な正義によっては確定できず正義よりも上位にある価値。

f 適・不適の次元で絶対的な測定によって客観的に示しうる価値。

問五 傍線部③に「われわれが用意していた大きなチョコレートの箱を、見舞いだといって差し出すことが、はたして十分に

善いことなのかどうか考えてみなければなるまい」とあるが、その理由として不適切なものを、つぎのa～dの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 病人は小さいチョコレートを婚約者に頼んだのに、それを知りつつ大きなチョコレートを差し出せば病人の心を傷つけることになるから。

b すでに貧しい婚約者からもらった小さいチョコレートで喜んでいた病人にもっと大きなチョコレートを差し出すことは、その病人の気持ちを考えない行為だから。

c 見舞いに行くのだから贈り物は大きいほうが善いと思っても、相手の感情を考えれば十分に善い行為にはならないから。

d 相手の立場に立とうとするならば、たとえ善意であっても一方的に大きな贈り物をするのは十分に善い行為ではないから。



問六 傍線部④に「美は何かという、その犠牲が規格を越えて大きいことである」とあるが、その説明として最も適切なものを、つぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 国のために規格を越えてまで税金を払うことは犠牲を払うことであり、それは正義の価値を示すことであるがゆえに美しい行為である。

b 視聴覚の不自由な子弟の教育に寄付をすることはもちろん美しい行為であり、人間として規格を越えた犠牲を払うことである。

c 人間にとって仕事をする動機は様々のものがあるにしても、自分の生涯を犠牲にするのであればそれはもつたいないので善い行為ではない。

d 自由な行為によって払われた犠牲の大きさが規格を越えている場合、それは美を越えた善であり、しかもただの善ではない。

e 恵まれない子弟の教育に自分の一生を捧げるといふ外見的には報われない仕事は、同情という面から考えれば善を越えた美である。

問七 本文の内容に合致しないものを、つぎの a ~ e の中から二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 人間は他の動物と異なった住居をこしらえていったが、適・不適からすれば、蛇が熊の閉じ籠る洞窟に満足せず自分の冬眠のために自分の細さにあった穴を求めると結局は同じことである。

b 病人を見舞うことが正しくさらに善いとしても、またたとえ小さな犠牲を払うことになるにしても、その病人がいつものような気持ちでいるのか、そしてどのような立場にいるのかをよく考えることが心ばえの美しさになる。

c 病院に見舞いに行くことは自分の時間を犠牲にすることであり、自分の利益にはならない行為であるから、このような規格を越えた行為が美である。

d 美はその至高の姿においては人間における最高の価値であり、その輝きは道徳的に模範となる善の落ち度のなさとは異なり、われわれの命に立ち上がる力を与えるがゆえに、美はわれわれを動かすのである。

e われわれは、自然界の海辺の砂粒も美しいといい、言語芸術におけるきらびやかな文章も美しいというが、人格の美、行為の美を考慮に入れなければ、最高の価値としての美は自然や芸術における美に匹敵することはできない。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

音楽の少なからぬ部分は語ることが可能である。それどころか、語らずして音楽は出来ない。このことをどれだけ強調してもしすぎではない。そもそも音楽家からして、本当は批評言語をクシしてはいるはずなのだ。靈感に導かれるまま五線譜にペンを、鍵盤に指を走らせれば、泉のように音楽が湧いてくるわけではあるまい。彼らは「ああでもない、こうでもない」と（たとえ口には出さずとも）自己批評しているに違いない。中には本能だけで出来てしまう天才もいるだろうし、逆に口は達者だが三流の音楽家もいよう。だが、たとえ彼らが公式には滅多にそういうことを語ったりしないにしても、音楽家の能力はかなりの割合で自己批評能力に比例する部分があるのではないかと、私は考えている。

楽器経験などがある人なら、この点はすぐに分かるはずである。いくら練習しても、自分のやっていることの一体どこがどう悪いのか、なかなか分からない。正確に特定出来ない。「だいたいいいのかなあ……」。だけど何かおかしいなあ……。何が悪いのかなあ……。「こんな風に印象がはやけたまま、ただ漫然と練習を繰り返し、時間をロウヒしてしまふ。」「この音はいいが、この音をもう少しくリアに浮き上がらせないとだめだ」などと、ピンポイントで修正箇所を見つけることが出来ないのである。逆に言えば、アマチュアのオーケストラや brass バンドにおけるトレーナー、あるいはプライベート・レッスンの先生などは、まさに「どこがどう悪くて、どう直せばいいか」を正確に教えるために、そこにいるのだろう。実は彼らは音楽批評家でもあるのだ。

音楽は言葉によって作られる——「流の指揮者のリハーサルなどを見れば、このことは一目瞭然である。最近ではいろいろな面白い映像がDVDで手に入る。特にチェリビダツケやフリッツチャイやクライバーの練習風景は、見る者すべてに鮮烈な印象を与えるはずである。テンイムホウに音楽をやっていると見える彼らだが、リハーサルでは絶え間なしにオーケストラを止め、詳細極まりない指示を出している。流麗な音楽は、実は言葉によって吟味熟考され、修正され、方向づけられた結果なのだ。しかも彼らが音楽に貼りつける言葉は、ただ説得力があるばかりか、どれも本当に面白い。こういうものを見てみると、ひょ

つとすると「音楽を語ることは」「聴くこと」以上に楽しいのではないかとすら、思えてくるはずだ。「音楽は言葉に出来る／音楽は言葉で作られる」ということの意味の、これ以上に説得力ある証はあるまい。

面白いことに、音楽家たちが日常的な音楽の現場で用いる言葉は、少なくとも私の知る限り、総じて碎けていて端的であり、感覚的で生々しい。

た——を、当の音楽家たちはまず使わない。それどころか彼らは、

「音楽家を納得させる語彙」の第一条件は、形而上学的でないこと、つまり身体的であることだという印象がある。

この意味で興味深いのが、右に挙げたようなりハーサル映像で指揮者たちが使っている言葉の性質である。彼らが練習で用いる語彙は、明確にいくつかのカテゴリーに分類することが出来る。一つは「もつと大きく」とか「ここからクレッシェンドして」といった直接的指示。二つめは「ワイン・グラスで乾杯する様子を思い描いて」といった詩的絵画的な比喩。そして三つめが、音楽の内部関連ならびに外部関連についての説明。内部関連とは「ここはハ長調だ」とか「再現部はここから始まる」といった音楽構造に関するもの。外部関連とは作品の歴史的文化的な背景についての説明などである。どれも「音楽を語る言葉」としてポピュラーなものだ。だが私が何より注意を促したいのは四つめの語彙、つまり身体感覚に関わる彼らの独特の比喩の使い方である。

りハーサル映像などを見ていて気づくのは、彼らが時として(あるいは頻繁に)、それを耳にした途端こちらの身体の奥に特定の感覚が湧き上がってくるような、一風変わった喩えを口にすることである。いわく「四〇度くらいの熱で、ヴィブラートを思い切りかけて」、「いきなり握手するのではなく、まず相手の産毛に触れてから肌に到達する感じで」、「おしゃべりな婆さんたちが口論している調子で」等々。それまで単なる抽象的な音構造としか見えなかったものが、これらの言葉がそこに重ねられるやいなや突如として受肉される。体温を帯びた生身の肉体の生きた身振りとなるのである。

また一見絵画的と見える比喩でも、指揮者の使う言葉はしばしば鮮烈な身体イメージを伴う。例えばスメタナ(モルダウ)のりハーサルでフリッツチャイは、「狩りの音楽」について「ここではもつと喜びを爆発させて、ただし狩人ではなく、狼犬の歓喜を」と

いう指示をしている。ここで意図されているのは、静止した詩的な絵画イメージなどではなく、もっと生々しい臨場感——制止もきかず跳ね回り、主人に抱きつこうとする犬たちの、四方八方にこだまする吠え声、小刻みに震える尻尾など——だろう。音楽が喚起するこうした身体／運動感覚について、ハンズリックが次のようなことを言っている。「音楽はいかなる感情も、いかなる情景も、絶対に表現することは出来ない」という文脈での発言である。まず感情について彼は、音楽は感情の運動的な側面（つまり感情内容ではない事象）を模倣するだけだという。

「音楽は」感情に関して何を表現できるのであろうか。ただ感情の動的なものだけである。音楽は物的な過程の運動を、早いか遅いか強いか弱いかとか、上昇的とか下降的にかのそれぞれのモメントに従い模倣することができる。「中略」「ただし」音楽は実際には感情自体を現わすこともできない」。

次に情景についても、彼は同じ主張をする。音楽は特定の情景を、それと同種の運動感覚を通して連想させることが出来るだけだというのである。

「私が雪片の降り来るさまや鳥の羽ばたきや日の出のさまを、音楽的に画くことができるのは類推的な聴覚現象、つまりこれらの諸現象に力学的な意味で似たところのある聴覚印象を私にもたらすことによつてのみである。音の高さや強さや早さやリズムを通じて耳に一つの『形』が与えられる。種々異なった種類の感覚の間を互に接触することのできる類推によつてこの『形』の印象が一定の視覚的な知覚をうるのである」。

とかくハンズリックは「音楽は音楽であつて、その外のものを表現したりはしない」と主張したが（それにも確かに一理あるのだが）。つまり音楽は言葉のような直接の指示機能を持っていない、単に同種の感覚を特定の音の運動を通してかきたてるだけだという否定的な文脈で、これらの発言はなされたものなのだ。だがハンズリックはこれらの記述において、まさに彼が躍起になつて否定しようとしていたこと（＝音楽は何かを表現する）を、極めて雄弁に肯定しているように思える。つまり運動感覚を通して音楽は、ありとあらゆるものを極めて生々しく喚起するとも言えるのだ。

少々理屈っぽくなるが、例えば右の例でいえば、確かに「スメタナの音楽は（狩人ではなく）猟犬の歓喜を表現している」ので

はない。むしろ逆に、音楽の中に本来内在している強烈な運動感覚が、「獵犬の欲び」という言葉を与えられることで、まざまざと私たちの身体に喚起されてくるのである。フリッチャイはこの箇所の前後で、四本のホルンがひとかたまりになって溶け合うことなく、それぞれが独立して四方から呼びかわし、こだまするような効果を再三求めている。おそらく「獵犬」という比喩も、こうした声部の独立性を詩的に表現したものであるところかまわず跳ね回る犬たちは、兵隊のように行儀よく整列して行進などしないわけだから。ここでは、音楽が獵犬を表現しているのではなく、「獵犬」という言葉が音楽構造の比喩——それも極めて鮮烈な——として機能しているわけである。

『わざ』から知る』という本の中で生田久美子は、特定の身体感覚を呼び覚ますことを目的とした特殊な比喩を、「わざ言語」と呼んでいる。彼女が例として挙げるのは主として日本舞踊である。その伝承においては、「指先に全神経を集中させて」とか「手をもっと上にあげて」といった、誤解の余地のない一義的な指示はあまり使われない。代わりに師匠たちは、「指先を目玉にしたら」とか「天から舞い降りる雪を受けるように」といった、一見突拍子もなく、あるいは曖昧な表現を使うのを好む（他にも生田は、「もつと腰を入れて」とか、「口ではいわずに腹でいう」とか、「揚げ幕に丸い穴をあけてそこから向こうをのぞくように」といった例を挙げている）。しかし彼らは、もつと明瞭に説明出来るものを、もつたいぶつてわざと遠回しな表現をしているわけではない。「手を右上下四五度の角度に上げる」といった表現はそれなりに正確かもしれないが、それでは単なる身体部位の一部分の表面的な「形」の模倣に終わってしまう。手を四五度上げればそれでいいというわけではない。むしろ一つの動作の細部ではなく、どういう身体全体の構えと感覚——生田はそれを「形」に對比させて「型」と呼ぶ——でもってそれを行うかが、とても重要なのだ。こうした動作の根源にある「型」の感覚を喚起するのが、わざ言語だということである。

私なりに言い換えるなら「わざ言語」とは、身体の共振を作り出す言葉である。それまでばらばらだった自分の気分（感情）／動作／身体感覚の間の関係。あるいは自分と他者との間の身体波長のようなものの関係。それが、一つの言葉を与えられた途端、生き生きと共鳴し始める。そういう作用を持つのが、わざ言語ではないか。ただ単に手を一定の角度だけ上げることが問題なのではない。何も考えず、感じず、ひたすら外面的な動作を正確に真似すればいいのではない。重要なのは、例えばひら

ひらとゆつくり舞い落ちてくる動き、冷たい白さ、ごく軽く脆いものを慎重に、優しく受け止めるイメージなどを共有することなのだ。

こうした言葉はパントマイムに似ていると言えるかもしれない。実際に舞台の上にセットを置いて演技するのではない。にもかかわらず、扉を開ける真似をする役者の身振りによって、屋根に雪の積もった一つの家がそこに現出する。それと同じような効果を持つのがわざ言語であって、その言葉を耳にするとともに、そこには存在しない「空から舞い落ちる粉雪」が、あたかも在るかのような感覚が身体の中に生じるのである。いずれにせよ、右に述べたような「四〇度くらいの熱で、ヴィブラートを思い切りかけて」とか「いきなり握手するのではなく、まず相手の産毛に触れてから肌に到達する感じ」といった指揮者の指示もまた、典型的な「わざ言語」である。

音楽は比喩を大量に用いずしては語ることが不可能な、特異な芸術である。それゆえ音楽批評は宿命的に、「くのような」で溢れかえることになる。もちろん「再現部の終わり近くになって、突如として減七和音を介した遠隔調への転調が生じる」と言えば、専門家ならかなり具体的な響きをイメージ出来るだろう。だがそれでは門外漢にはほとんど理解出来まい。一般的な表現を心がけようとするなら、「曲の終わり近くで、魔法の扉のような甘い響きを通して、思いがけない風景が目の前に開かれる」といった表現に頼らざるをえない。詩人にならざるをえないのだ。そして「くのような」が主観的な詩的夢想に陥ることなく、まるでパントマイムのように生きた音楽をまざまざと現出させることが出来るかどうかは、まさにそれが「わざ言語」として有効に機能するかどうか、つまりリアルな身体感覚をどれだけ喚起出来るかにかかっているのではないだろうか。

(岡田暁生「音楽の聴き方」より。ただし原文の一部を変更した。)

注1 チェリビダツケやフリツチャイやクライバー いずれも二十世紀に活躍した指揮者

注2 ハンスリック 一九世紀オーストリアの音楽美学者

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア) クシ

- a 対応にクリヨする。
- b 鋭いケイクを吐く。
- c 比較文化研究のセンク者。
- d 費用をクメンする。
- e クオンの彼方。

(イ) ロウヒ

- a ホウロウの旅に出る。
- b ロウキユウ化した建物。
- c 詩をロウドクする。
- d ガロウで展覧会を開く。
- e 長年のコウロウに報いる。

(ウ) テンイムホウ

- a ホウマンな肉体。
- b 反対派を国外へツイホウする。
- c ホウガイな金額を請求される。
- d 風邪薬をシヨホウする。
- e 紳士服をホウセイする。



問一 本文中の空欄

A と B

に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、つぎの a～e の中から一つ選

び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a A 視覚 B 聴覚
- b A 即物 B 具体
- c A 観念 B 身体
- d A 一義 B 精神
- e A 具体 B 感覚

問二 傍線部①に「体温を帯びた生身の肉体の生きた身振り」とあるが、筆者がこのような表現を用いる意図として最も適切な

ものを、つぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a これらの言葉を耳にすると、それまで抽象的な音構造としか見えなかったものが、指揮者の身振りを通して具体的にイメージできるようになることを説明するため。

b 指揮者たちが身体感覚の中でも特に、「四〇度くらいの熱で、ヴィブラートを思い切りかけて」といった体温にかかわる比喩を好んで使うことを強調するため。

c 音楽は単なる抽象的な音構造などではなく、生身の肉体を持つ生きた人間によって作られるものであることを説明するため。

d 指揮者たちがこれらの一風変わった喩えを口にすると、オーケストラが突然、大きな身振りをつけて生き生きと演奏し始める様子を表現するため。

e 指揮者たちが使う独特の比喩を耳にした途端に、音楽が生々しい身体感覚を通してリアルに立ち現れてくるということを説明するため。

問四

傍線部②「ここではもっと喜びを爆發させて、ただし狩人ではなく獵犬の歡喜を」という言葉には、筆者によればどのような効果があるか。つぎのa-eの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 制止もきかず跳ね回り、主人に抱きつこうとし、尻尾を小刻みに震わせる獵犬たちの動きを、音楽によって描写できるようにする。

b 狩人ではなく獵犬の喜びを表現するように指示することによって、人間の中に本来内在している動物的な身体感覚を呼び覚ます。

c ところかまわず跳ね回り、兵隊のように行儀よく整列して行進などしないという獵犬のイメージを喚起することによって、自由にのびのびと演奏できるようにする。

d 喜びにかられて跳ね回る獵犬たちの動的な身体イメージによって、音楽の中に本来内在している運動感覚を身体に生々しく呼び起こす。

e 獵犬たちの吠え声が四方八方にこだまする様子を再現するために、四本のホルンがひとかたまりになって溶け合うことなく、それぞれが独立して四方から呼びかわし、こだまするような効果を生み出す。

問五 傍線部③に「ハンスリックはこれらの記述において、まさに彼が躍起になって否定しようとしていたこと（＝音楽は何かを表現する）を、極めて雄弁に肯定している」とあるが、この文に見られる論理の構造を表す言葉として最も適切なものを、つぎのa～fの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 演繹    b 逆説    c 比喩    d 短絡    e 帰納    f 類推

問六 本文で述べられている「わざ言語」の説明としてあてはまらないものを、つぎのa～gの中から三つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a その言葉を与えられた途端に身体の奥に特定の感覚が湧き上がってくるような独特の比喩。  
b 一見突拍子もなく曖昧な表現を用いてその意味を深く考えさせることによって、動作の根源にある「型」の感覚をつかませることを目的とした喩え。  
c 身体部位の一部分の表面的な「形」の模倣を通して、身体の共振を作り出す言葉。  
d その言葉を耳にすると、自分と他者との間で特定の身体感覚を共有することができるような言葉。  
e 外面的な動作を正確に真似させることによって、その根底にある身体感覚を喚起する言葉。  
f 実際には存在しないものがあたかも存在するかのような感覚を身体の中に生じさせる言葉。  
g 有効に機能すると、生きた音楽をリアルな身体感覚を通してまざまざと現出させることができる言葉。

問七 本文の内容に合致するものを、つぎの a ~ g の中から二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 音楽は言葉にできるし、言葉によって作られるということは明らかだが、音楽家たちは日常的な音楽の現場では、直接的な指示よりも詩的絵画的な比喩を使うことを好む。

b アマチュアの音楽家にとって指導者は、自分の演奏の問題点や改善のしかたを的確に言葉で指摘してくれる存在である。

c 一流の指揮者がオーケストラのリハーサルで用いる言葉の中には、「わざ言語」として機能するものが含まれている。

d ハンスリックは音楽は言葉のように感情や情景を直接に表現することはできないと主張するが、これは間違いである。

e 日本舞踊の伝承においては、「型」よりも「形」を伝えることのほうが重視されている。

f 音楽とバンドマイムの共通点は、どちらも言葉を使わず身振りによって、実在しないものがあたかも在るかのような感覚を生じさせることができる点にある。

g 音楽を比喩を用いて語る際に、門外漢は主観的な詩的夢想に陥りやすいが、専門家なら「わざ言語」を用いてリアルな身体感覚を喚起することができる。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間の遊びの最も主要な形態のひとつであるゲームは、その数も多く、種類も多様であり、したがって人びとのゲームへの好みもまた多様に分化する。たとえば麻雀のように「人事」と「天命」とが適度に配合されたゲームを好むか、「人事」に傾斜したゲームを好むか、あるいは「天命」型のゲームを好むか、それは人によってさまざまである。また、さまざまであつてよい。一部の人びと、とくにインテリ層には、勝敗が「天命」(偶然)に依存する度合の低いゲームほど、逆にいえば「人事」(技能)に依存する度合の高いゲームほど「高級」であるかのように考え、そのようなゲームを好む傾向がみられるが、これはいわば「文明の好み」の反映であらう。文明というものは、偶然の作用を人為の力で統制することによって発展してきたので、偶然を嫌い、できるだけその作用を否定しようとするからである。

注<sup>1</sup> レマルクの『凱旋門』のなかにチエス好きの老人が登場する。大戦前夜のパリ、各国の亡命者や避難民の吹きだまりのようなオテル・アンテルナシヨナルの食堂兼ホールの地下室で、「教授」と呼ばれるこの老人は終日チエスに時を<sup>注2</sup>うつつしている。彼はいう。「気がまぎれるからね。チエスはどんなトランプの遊びよりも完全ですよ。トランプには、どうしても運不運があつて、ほんとに面白いものじゃない。ところが、チエスは、それだけで一つの世界だ。やつてる間は、外の世界のことば忘れてしまう。……その外の世界というのが、あまり完全なものじゃないんでしてね」。

たしかにチエスは、たとえば麻雀のように「人事」(技能)と「天命」(偶然)とが適度に配合されているゲームとちがつて、偶然の要素をできるだけ排除するように構成されている。しかし、それはあくまでも「できるだけ」にすぎないのであつて、ゲーム世界から偶然の作用を完全に排除することは、まず不可能である。理論上はともかく、実際のゲームの展開過程では、さまざまの偶然的要因の作用が介入してくるのを防ぐことはできない。さらには、勝敗を争うというゲームの基本的性格そのものうちに、すでに不確定のチャンスに賭ける要素がふくまれている、ともいえるだらう。結果があらかじめわかっているとしたり、ゲームは成り立たない。技能の差が明白で、結果がほぼ確実に予測される場合には、通例、なんらかのハンディキャッ

プが付され、結果の不確定性が保証される。カイトワのいうように、「失策や思いがけないことの起る可能性がまったたくなく、ゲームの展開過程が前もってわかっており、不可避的な結果に到達することが明白だとしたら、それは、遊びの本質と両立しない」。したがって「ゲーム展開が決定されていたり、先に結果がわかっていたりしてはならない」。そういう意味で「実力の競技者も究極においては運命に身をゆだねる」のである。こうして、あらゆるゲームの根底には必然性が横たわっている。だから、勝敗が「技能」に依存することの著しいゲームにおいても、すぐれたプレイヤーは決して必然性への敬意を忘れない。このことは、しかし、単にゲーム世界だけにかかわる事柄ではない。

偶然性の問題を、人間存在そのものの根底に横たわる問題としてとらえ、それについてすぐれた考察を展開したのは、<sup>注4</sup> 周造である。彼によれば、偶然性の存在論的意味の核心は「無いことの可能」ということである。そうではかありえないのが「必然」であるのに対し、たまたまそうあるにすぎない(したがって、他でもありうる)のが「偶然」である。そして「無いことの可能」が「無いことの必然」へ近迫するとき、偶然性は極大となる。こうして「偶然性にあつて、存在は無に直面している」。いかえれば「偶然性とは存在にあつて非存在との不離の内的関係が目撃されるときに成立するもの」であり、「ア」が「イ」に根ざしている状態、「ウ」が「エ」を侵している形象「である。それは「有と無との境界線に危く立脚する」ところの「脆き存在」であり、「崩壊と破滅の運命を本来的に自己のうちに蔵している」。けれども、まさしくそうであるからこそ、そこには、必然的決定のうちには決してあらわれない「個性と自由」とが、また「生命の放埒と恣意の遊戯」とがあらわれうるのである。偶然性への感覚を欠き、「理論に実践に常に必然性を把持する者」や「可能性の追求にのみ心を砕く者」は、みずからの存在の根底にある「無」を「原的に直観することがないため、自由な存在としての自己の実存の自覚に到達することができない。

こうして、偶然性への敬意とは、存在論的にみれば、「無」への敬意であり、存在(「有」)の脆さへの自覚である。したがって、それは、存在の思ひ上がりをいましめる意味をもつ。この論点は、少し見方を広げると、文明論的な視点にも結びつく。たしかに文明は、人為をこえた運命の支配を否定し、偶然の作用を統制し排除することで発展してきた。だから文明は、偶然を嫌

い、できるだけその働きを認めまいとする。そしてさらには、あたかも偶然を制圧しえたかのようにふるまいはじめる。だがむろん、いかなる文明といえども、偶然性の作用を完全に排除することはできない。予測しえない偶発事の可能性は常に残さ  
れている。そのうえ、高度に発達し、複雑化した文明ほど、いったん偶然性の復讐にあうと、大きな被害を受けやすい。

文明を信頼するのは悪いことではないけれども、あまりに信頼しすぎるのは考えものだ。むしろ、文明もまた「無に根ざす  
脆き存在」としての性格をもつことを認め、文明の思ひ上がりを絶えずうち消してゆく姿勢が大切だと思う。

(井上俊「遊びの社会学」より。ただし原文の一部を変更した。)

注1 レマルク ドイツの作家

注2 時をうつす 時間を費やす、ひまをつぶす

注3 カイヨワ フランスの文芸批評家、社会学者

注4 九鬼周造 日本の哲学者

問一 傍線部①「文明の好み」の反映であろう」とあるが、筆者はなぜそのように推測しているのか。その理由として最も適切  
なものを、つぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 文明は、「人事」と「天命」の適度な配合のもとで発展してきたから。

b 文明は、「天命」に左右される度合いが低かったから。

c 文明は、「天命」を「人事」によって乗り越えようとすることで発展してきたから。

d 文明は、「天命」を重視しながらも「人事」によってそれを統制してきたから。

e 文明は、「人事」によって「天命」を制圧したから。

問二 傍線部②「チェス好きの老人」を筆者はどのような存在として取り上げているのか。つぎの a ～ e の中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 人為をこえた運命の支配を乗り越えたインテリ。
- b/ 運命に身をゆだねる競技者。
- c ハンディキャップが付されたプレーヤー。
- d 偶然性への敬意を払わない文明人。
- e 文明の思い上がりを絶えすうち消してゆく姿勢をもつ者。

問三 傍線部(a)～(e)の中には、このままでは意味が通らないものがある。それをすべて選び、その記号を解答欄にマークせよ。

問四 傍線部③「遊びの本質」の内容にあてはまるものを、つぎの a ～ f の中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 「人事」と「天命」が適度に配合されていること。
- b 「人事」に依存する度合が高いこと。
- c それだけで一つの世界として完結していること。
- d 勝敗を争うときに、「天命」を排除できないこと。
- e 結果が事前にはわかっていないこと。
- f 勝敗が「技能」に依存することの著しいこと。



問五 本文中の空欄

ア

エ

に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、つぎの a ～ f の中から一つ選

び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a ア有 イ無 ウ有 エ無
- b ア有 イ無 ウ無 エ有
- c ア無 イ有 ウ無 エ有
- d ア無 イ有 ウ有 エ無
- e ア有 イ有 ウ無 エ無
- f ア無 イ無 ウ有 エ有

問六 本文中の筆者の主張と合致しないものを、つぎの a ～ f の中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a チェスは勝敗が「技能」に依存することの著しいゲームであるが、それでも偶然の作用を完全に排除することはできない。
- b チェスは、「天命」(偶然)に依存する度合が低い点で、麻雀よりも「高級」である。
- c 偶然性を否定しようとしても、人間にはたまたまそうあるにすぎない面がある。
- d 「個性と自由」は、偶然の作用を統制し排除した結果得られるものである。
- e 文明は、偶然性の作用を極力排除しようとすることで発展してきた。
- f われわれは偶然性への敬意を払い、人為をこえた運命の作用を受け入れる必要がある。